

広島俳句倶楽部

令和六年十月作品集

俳句を楽しむ 辻純江

昔、藤田湘子先生が「一日に十句作ろうと思う」と話されたことがあります。その時は驚きましたが、私なりに、日記をつけるように句を作るということかなど理解して、続けてきました。一人で吟行するのを楽しみながら、今日まで俳句を続けてきました。最近はずっと、頭が詰まってきたが、まだしばらく、楽しく俳句を作りたいと思います。

八ヶ岳夏山となる露天風呂

初茄子に利尻の塩を振りにけり

氣に入りのぐい呑みにして盆の月

黒雲の流るる玻璃戸台風圏

台風過すずめの声のする朝

天高し行きと帰りの道を変へ

地下鉄の四番出口秋の空

秋夕焼縄文人も畏れしか

流水の獅子の頭となり秋の海

夫と居て言葉の要らぬ夜長かな

《作品鑑賞》

井藤 希

時に歳時記が破れるほど長く俳句を詠まれてきた辻さんの作品は軽やかで読んでいてもまことに楽しい。目の前にその句の光景が素直に広がるのである。楽しく俳句を作るとはこういう事なのだろうと思える辻さんの夏から秋の句である。

初茄子に利尻の塩を振りにけり

初物は嬉しいものだが初茄子はとりわけ楽しみなものである。「利尻の塩」が効いていて作者が料理を心から楽しんでる気分が伝わってくる。利尻の昆布塩だろうか。読んでいるだけで酒が進みそう。

台風過すずめの声のする朝

台風の荒々しい音が止んで明るくなってきた窓の外にすずめの鳴いているのが聞こえてきた。「すずめの声」がこの日の朝の静けさを際立たせるとともに、台風が去ってほっとした安堵感と、すがすがしい朝を迎えた喜びを感じさせてくれている。

天高し行きと帰りの道を変へ

爽気の中でいろいろな秋の景色を味わいたいという作者の気持ちの高まりが「行きと帰りの道を変へ」に表れている。外にいるだけで楽しくなる秋の一日の軽快な一句である。

佐保光俊

伯耆から戻りて吉備の今日の月
安芸に来てジャズ聴いてゐる月の秋

高尾ひとみ

月天心ひとりの夜の澄みわたる
天心に昇れば晴れて後の月

あざみ

文机に差し込む月や文を書く
兄弟で素振りしてをり秋の月

亜矢

待宵や旅より夫の帰り来て
トンネルの上にかかりて小望月

綾乃

名月を待つや我が家のこの窓に
良夜かな仕事ばかりの母なれど

井藤希

道辻に幼子連れて月見かな
月光のビルへ降り来る今宵かな

栄吉

月白やけふ一日の匂を仕舞ふ
月の下夫と合わせる歩幅かな

大畑恵

満月の道輝いて瀬戸の海
満月や母に芒を飾りをり

暁子

雲の色わづかに残り月上がる
四五人の先行く人や十三夜

すみれ

夫を呼ぶ共に見ようよ今日の月
月光の差せる所に枕置く

知佳子

ひとひらの雲の剥がれて今日の月
天上の笑顔にも見え今日の月

ちどり

月明に我が娘赤子を産みにけり
月の夜娘起きては授乳せり

辻純江

盆の月夫にも泣いて赤ワイン
月代や今日一日を家に居り

雲雀

退院の息子の傍で月見かな
繰り返し同じ本読む良夜かな

ふじ女

カラカラと扉軽やか月今宵
名月はいかなる夫婦にも一つ

松田裕子

子の夢を聞きつつ歩く良夜かな
お月様に兔居るよと若き母

村上正人

母と親る今宵の月を忘るまじ
西空に彗星を見て十三夜

森口良樹

一人出で宴の最中の秋の月
更待や一両電車降り立てば

大原良子

電線を五線譜として月懸かる

上島康子

寝つけずに窓開けて見る二十日月

河原静子

庭に出て姉と見上ぐる盆の月

紀英子

満月は真綿の雲から生まれくる

熊谷ゆり子

鳩の飛ぶ夕空見れば秋の月

桑門わかこ

散会の寺に見上げて秋の月

須美れい

境内に陰一つなく十三夜

高嶋銅代

満月や子らに臍の緒手渡しぬ

高梨英子

弟の嫁も並びて月見かな

民

厚き雲満月のあかり隠しをり

土肥律子

嫁に出し月を眺むるひとときよ

金つ

おおといふ声に目をやる月の道

撫子

月の夜や飛行機徐々に下降せり

みさ子

満月に時を忘るる窓辺かな

美耶

海の月停泊中の船照らす

やす保

待宵の風に佇む岸边かな

山崎桂子

月摺むポーズで自撮りしてゐる子

山野ウタ

妹に電話してをり小望月

みんなを見上ぐる山の高さかな

とんばうや古道は川の向うとふ

底紅やまた新しき道通ず

秋驟雨古道を歩き終へてより

伯耆までもう少し秋川を見る

伯耆へと秋の日を受け九十九折

秋の山みな峙ちて伯耆かな

街道は刈田稲田と下りゆく

根雨に居て聞き分けてゐる月鈴子

草刈つて我を離れぬ秋の蝶

佐保光俊

この町もまた鶺鴒の駆けてくる

つくつくし川はゆるりと曲がりたる

峡の田に畑に釣瓶落しかな

鈴虫の声聞く宵や峡の駅

盆の月橋に二人の影曳いて

律の風窓にみ空の白みくる

月草に昨夜の雨かや玉となり

雀ごと枝揺れに揺れ野分かな

ほろ酔ひのジャズ口遊む秋の夜

夜半の雨律の調べとなりけり

高尾ひとみ

石の上少しづつ跳ぶおんぶばつた

どの道を行くも道沿ひ猫じやらし

コスモスや回して運ぶガスボンベ

虫の声置きつ放しの三輪車

湯浴みして耳傾くる虫の声

幼馴染顔を揃へて月の膳

秋雨の傘を一振り家に入る

コーヒーの強き香りや秋の雨

独り居の厨煙らせ秋刀魚焼く

水澄める川を渡りて友の家

あざみ

やはらかき虫の声する子規忌かな

うす暗き真つ直な道秋の声

枕辺に旅のリユックや秋ともし

無花果の皮剥く十指汚しつ

仲秋やクラリネットで赤とんぼ

すれちがふ人の影見る秋の暮

枝に立ち枝剪つてゐる秋気かな

蜻蛉の後ろからきて堀を越ゆ

雲様に少女がひとり秋の草

モーツァルト流しひとりの秋の昼

亜矢

大公孫樹より聞こえたり秋の蟬

秋の蝶飛んで備後の狭霧かな

潮騒の路地を曲がれば今日の月

子の造る魚を待つて今年酒

飛蝗追ふ集合時間氣にしつ

おすすめを食ふるビストロ秋ともし

推敲の混沌樂し夜長かな

けふも子に振り回されて秋の星

車椅子導くやうに秋の蝶

病むひとの窓に至るや秋の蝶

綾乃

この道の真ん中を飛び銀やんま

きちきちを見つくる犬の真顔かな

逃げもせず近寄りもせず秋苗

犬共に留守居してゐる秋の昼

大松の影のまだ濃き秋の浜

夕月夜親子の釣りの浮子光り

海べりの石段に座し月今宵

星月夜鼻歌の出る家路かな

犬駆くる広野に風や秋半ば

浜に聞く鰯の跳ねたる二度三度

井藤希

この奥に八幡御座す秋の蝶

街道の古き家並や秋日和

権の突や散歩の犬の鼻の光

小鳥見る双眼鏡に傷數多

稔り田をかすめて列車過ぎにけり

電線もトタン屋根にも稲雀

稲刈や幼馴染みが曾孫抱き

川土手の日差しは強し彼岸花

新聞の運る朝や金木犀

金木犀なごみの犬が尻尾振る

栄吉

玻璃越しに指差す先の赤蜻蛉

裏庭にまだかと探す茗荷の子

繁る葉の中に探して葛の花

朝通る道のあちこち萩の花

秋茄子を籠へと一つ一つ摘めり

秋茄子を煮たり焼いたり夕餉にと

曼珠沙華いつもの場所に咲いてをり

摘んできて母に供ふる曼珠沙華

無花果を残して鳥を待つてをり

木犀の香れる寺に参りけり

大畑恵

路地裏に遊ぶ子の声菊日和

色鳥の朝の宮居を横切れり

磯洗ふ秋の波高し山陰路

沖の船島陰に消え雁渡し

雨止んでいざよふ月の帰り道

ころ柿に陰りの早き峽住ひ

威し銃とどろき出せる牧の朝

小流れにはやも紅葉づる枝を漬け

雨止んで俄かに秋の寒さかな

残菊の咲いて山家のとびとびに

暁子

草原に入れば数多の飛蝗飛ぶ

きちきちを店から外に放ちたり

吾子泊まり幼なじみと新酒酌む

峠越え里への道に彼岸花

山の端の月代に飛ぶ鳥の影

ビル群の上に現はれ芋名月

栗の毬屋根に車道に落ちて爆ぜ

稔田の傍を自転車下校の子

栗分けて子と妹に日の暮るる

新米の炊ける香の満ち若夫婦

すみれ

秋雲の懸かる山の名教はりぬ

梅花藻の揺れ通しなる秋の川

集落に入りて道問ふ柿日和

街道の分かるるあたり鰯雲

湖までの道たはむれに飛蝗追ふ

もう一度湖ふり返り暮の秋

酔ふほどに歌ふ旅人秋の暮

団栗を踏みつつ登る古戦場

宿場町の軒をくぐりて新酒買ふ

ありたけの新酒振る舞ふ店主かな

知佳子

赤子へと日傘差し掛け散歩する

遠花火赤子すやすや眠りをり

母は居ぬ一本一本稗を抜く

四方から家族で稗を取りにけり

秋茄子が取るるやうにと枝を折る

螳螂の正面に行き顔を見る

一枚だけ残る田圃の稲を刈る

授乳する娘とともに秋刀魚食ふ

十月や赤子湯船に浮かびをり

一枚の蒲団に眠る嬰と母

ちどり

色鳥や暗き色して街の川

鶺鴒の鳴きつ川を上りけり

後ろから自転車が抜き猫じやらし

菊酒や夜間飛行の灯が過る

竹春やトンネルを出てトンネルへ

月代や貨物列車の通り過ぎ

月代や笑ひ声して人通る

龍淵に潜み赤子のよく眠る

蘆赤し川の流れの穂やかに

鴈の贅山の湖濁りたる

ふはり来て暫くそこに秋の蝶

虫の音の中に眠りぬ窓を開け

秋茄子の夕餉に箸の進みをり

良夜にはこの曲と決め聴いてをり

子が癸ちし部屋の机に月明り

栗を剥く友の笑顔を思ひつつ

夫の背に薬を塗れる秋の夜

そつと手に揃うてをりぬ秋の水

住み慣るる家の軋みや秋の暮

衣被幸せですと仏壇に

遠足の歩む紅葉のつづら折り

曲がり角順に子の出づ紅葉狩

紅葉川世界一の滝に落つ

柔らかく船頭が竿さす紅葉川

深淵の水深七メートルに秋

村の柿名産らしく初々し

スプーンの大きさ菊戴の影

寒暖を共々に抱く秋の風

生きている枝より生きて朱の枯葉

秋の歌揺れて吊り橋渡りおり

辻純江

雲雀

ふじ女

敗戦日父はぼそりと友の事

抑留の叔父に供ふる鶏頭花

父母逝きて叔父叔母逝きて地虫鳴く

賑やかな声の静まり燕去ぬ

虫の音の路地を出づれば遠くなり

鈴虫やりハビリ室は日の暮れて

懸崖菊竹しならせる祖父の指

高原は色なき風の中にあり

濡れそばつ秋海棠の日暮かな

二階の子呼んで夜食の梅茶漬

本屆き予習を始む夜半の秋

霧かかる荒谷山を見上げたる

水引の小花付きたる客の靴

頂ける柿をそのまま仏前に

木犀の香る道ゆく星無き夜

金木犀朝日の中を香りけり

隧道の中を抜けたる秋の水

隧道を抜けたる光の檻紅葉

コスモスに囲まれてる駐車場

城跡や色づく蔦に日の差して

位職と挨拶交はす墓参り

朝顔の咲いて引き継ぐ守衛室

つくつくし鳴いて日暮を早むるか

秋めくや朝の散歩の日も風も

自治会の輪に促され金踊

相輪の白き瞬き稲つるび

朝まだき堰の轟く秋出水

川風に吹かるる散歩虫の声

鰻飛んで飛んで川面を遡る

鯉跳ねてゆるぶ水輪に今日の月

松田裕子

村上正人

森口良樹

通り雨稲架を濡らして行きにけり

昨日今日畦に見かけて秋の蛇

畦道は線路へ続き曼殊沙華

傾ぎたる紫苑を柵に結びをり

養虫に雌雄のありて目を凝らす

誰彼に電話したくて秋の暮

身に入むやミッシン終へし宇宙船

新しきミッシンに替へて夜なべかな

半世紀この家に住み障子洗ふ

山野ウタ

秋草をそのまま取りて菴に入れ

木犀の香りに引かれ立ち寄りぬ

銀杏を踏み潰しながら歩きをり

獣糞に銀杏ばかり出てをりぬ

山茶花の色とりどりの道を行く

冬風の通夜の御堂の狭きかな

月冴えて黙いるかと思入るほど

紀英子

指先を残る蚊の刺し痒きこと

雑草に混りて揺るる秋桜

小鳥来る児童主役の絵画展

草原の続く大地や馬肥ゆる

里帰り母は変はらず林檎剥く

パイ生地を格子に組んで林檎焼く

大原良子

踵あげ葡萄一房取りにけり

手のひらにレモンの香り残りたる

山裾の芒の穂光風にゆれ

木犀の香る方へと回り道

畦道に群れ咲きにけり曼珠沙華

行く秋の日暮の道を歩きをり

河原静子

リハビリを終へたる後の氷菓かな

台風や庭の古木が氣に掛かり

草取つて腰を伸ばせば秋の風

不思議なり俄かに虫の音の途絶え

新米は研ぐてはなくて洗ふなり

文化の日明治節の詩懐かしく

須美れい

灯を消して月下美人の咲くを待つ

実石榴の弾けぬままに揺れてをり

秋刀魚焼き厨にシヨパン聴いてをり

ころころと零余子転がる厨口

帰るとふ子に山盛の零余子飯

外国の人追ひ掛くる女鹿かな

高嶋絹代

銀杏を避けて歩道を渡りたる

銀杏を今年も拾ふ老夫婦

見渡せどその姿なし金木犀

亡き友の里より酢橋届きけり

薄紅葉せる参道を進みたり

前を行く夫の背中に入るのこづち

撫子

一日の電灯消せば虫の声

菊日和友の緑り言聞いてをり

ねこじやらしコップに挿して一人酒

秋麗や弁士の語る原節子

弟の肩持つ母や草紅葉

高梨英子

招かれて吾子の新居や風薫る

日に近く焼けはしまいか揚羽蝶

穴子飯つくりて思ふ嚴島

眺めをり屋根の間の今日の月

持ち上げて大玉りんご箱で買ふ

土肥律子

畦に摘み部屋に落けたり並の花

坐禅してをれば聞こえて秋の蟬

鶴の声に見上ぐる大樹かな

露草やなつかしき夢見るやうな

長月の道にまた聞く子らの声

なつ

行きは咲き帰りは萎む芙蓉かな

踏切を越えて香れる金木犀

黄落や青信子を見送つて

ゆつくりと影の伸びゆく秋の暮

上島康子

秋雲や焼きたてのパン手に提げて

丁寧に靴紐ほどき月の客

戸を閉めて障子を開けて月の夜

雨のまま旅は終りぬ萩咲いて

桑門わかこ

空高し行き合ひの雲せめぎ合ひ

ト口箱に積み上げてある秋刀魚かな

朝市の零余子抱へて帰途につく

芝隠し桜紅葉の散り始む

民

路地に入り何処か香る沈丁花

秋の蝶車の前に現はるる

秋晴や高速道を加速して

畦に沿ひ群れ咲いてをり曼殊沙華

美耶

芋名月今日の献立決めてあり

団栗を拾ひコサージュ作りをり

公孫樹散る犬と遊べる子の上に

みさ子

天高し山から山へ風が吹き

切株に葎が一つ生えてをり

道端にどうぞと籠の穂紫蘇かな

やす保

令和六年九月度作品集より

暁子 私の選んだ十句

踏み入れば国分尼寺の砂灼けて
更ける夜や古米の虫を除きたる
万葉の道にも咲いて花木僅
ヒロシマの句を読んでをり晩夏光
行きどころ無き蔓伸びて秋の庭
歳時記の破れ繕ふ夜半の秋
芙美子の生家訪うて蜩の坂
下流へと驟雨の音の移りけり
ライオンの深き眠りや秋の風
二番花さらに緋の濃きカンナかな

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
亜矢
知佳子
辻純江
松田裕子
森口良樹
土肥律子
撫子

すみれ 私の選んだ十句

一面の夏草刈られ国分寺
亡き父の手紙見つくる夜長かな
吾が傍をとんぼ飛び交ふ宮の跡
検診を終へし足取り鴈日和
友宛ての切手涼しき色を選ぶ
勝手口開けて虫の音通しけり
山腹のこども人住み花オクラ
行きどころ無き蔓伸びて秋の庭
夫に云ふやつと蕃茄の熟れしこと
真ん中をじやんけんする子大西瓜

佐保光俊
村上正人
高尾ひとみ
あざみ
亜矢
綾乃
暁子
知佳子
雲雀
高梨英子